

古典文献と格闘を

Fujii, Michiaki

藤井 倫明

台湾師範大学 東アジア学科 副教授



大学院では、中国哲学史研究室に所属し、中国近世の思想、特に宋学を研究テーマに選び、学びました。思えば、九大の研究室を離れてもう15年、現在は、台湾師範大学の東アジア学科で教鞭をとっています。私は、愛知教育大学教育学部国語科を卒業後、九大の大学院に入ったのですが、九大に来て強く感じたことは、学問、研究することの「心地よい重み」のようなものでした。7年間の大学院在学中には、挫折や辛いことも多々あったはずなのですが、今となっては師に恵まれ、環境に恵まれた中で、存分に学び、自由に思索できた日々が懐かしく思い出されるばかりです。

中国哲学史を専攻した私が、大学院で受けた授業は、主に漢文で書かれた中国の古典文献を正確に読解していくというスタイルのものでした。毎週繰り返される、丹念に辞書を引く、字義や典拠を確認しながら、訓読或いは現代語訳していくという作業、それはとても骨の折れる地味な作業でしたが、こうした訓練を通して、研究対象やテキストに対する敬意、文献に即して考える実証的態度、研究者としてのあるべき専門意識などを叩き込まれました。

人文科学の分野では、テキストを正確に読めるということが、プロの研究者として立ち立つための必要最低条件だと思います。私が、今、大学に籍を置き、好きな研究を続けられているのも、大学院時代に培った文献読解の基礎があればこそです。

今、中国哲学に限らず、外国の文学や思想の研究を志しておられる皆さん、大学院時代は、辞書を手に大いに古典文献と格闘してください。非常に地味で骨の折れる作業ですが、院生時代に培った読解能力は、必ず強力な武器となり、研究者としての将来を切り開いてくれるでしょう。そもそも古典とは長い時間をかけて選り抜かれた人類の叡智。底知れぬ滋味・魅力に溢れています。そのような古典と日々向き合い、対話できるとは、何と幸せなことでしょう。

最後に一言。私は、語学のセンスが正直に言って最悪というタイプですが、今、台湾に身を置き、曲がりなりにも中国語で授業をし、シンポジウムなどでも中国語で発表しています。国外の学者と学術的議論ができることで、自分の視野がかなり広がったと実感しています。外国語というものは、私のように語学的センスのない者でも、時間をかけてやれば、何とかなるものなのです。今後、人文科学の分野でもグローバル化が加速し、国外の学者と交流する機会が増えていくでしょう。皆さん、広い世界を視野に据え、自信と勇気を持って、語学の習得にも励んでください。

大学院進学という選択

Tanaka, Misato

田中 美彩都

歴史空間論専攻 朝鮮史学専修 博士後期課程



私は一度公務員として就職し、職を辞して再び大学院に入りなおしました。現在、朝鮮史学研究室に所属し、博士号の取得にむけて研究に取り組んでいます。

私にとって大学院へ進むという選択肢は、なかなか勇気のいるものでした。勉強を続けたいという思いがあった一方で、周囲の優秀な人と比べて自分が研究成果をあげる自信が持てなかったこと、学部を卒業した友人たちが次々に就職していくなか、学問を続ければ実社会とのつながりが断ち切れてしまうのではないかと不安だったことがその理由です。

しかし、就職してみてもその考えは大きく変わりました。私の職場では、年に数度、研究者を招いた勉強会が開かれていたのですが、そこで、行政の問題を解決するにあたって、学問という支柱が必要とされている現場を目の当たりにし、おそまきながら社会における学問の重要性を認識したのです。また、新たな環境に身を置いたことで、自分

が生涯をかけて何を成し遂げたいのかを真剣に考える機会を得、周囲の方々にも背中を押していただいて再び大学院の門を叩くに至りました。

現在は、朝鮮史学、とりわけ近代朝鮮の家族制度史を研究しています。指導教官である森平教授の、単に日本とのかかわりからアプローチするのではなく、朝鮮史に人類社会の本質を理解する手掛かりとしての学術的価値を見いだそうとする研究姿勢に感銘を受けたこと、そして福岡という朝鮮半島に近い場所ならではの地の利をいかして研究をすすめられることが進学の決め手となりました。

くわえて、研究室に所属する学生は、大学院生から学部生まで、和気あいあいとした雰囲気なか、ときに切磋琢磨しながら、日々楽しく勉強しています。このような環境は、ともしれば孤独になりがちな大学院生活の活力源となっています。研究室では毎年、多くの学生が留学や旅行、史料調査などの目的で韓国に赴くほか、年に一度はかならず踏査を実施するなど、文献史学とはいえ研究室外に出て活動することが推奨されています。私自身も、国内外における史料調査や学会・研究会への参加を通じて、様々な研究者と意見を交換する機会を積極的に持つようにしています。私の専攻する時代は指導教官の専門とは異なりますが、このように自発的に行動すれば問題は払拭されると感じています。

いま、私は恵まれた環境のなかで自分のやりたい研究に没頭する時間を与えられ、充実した毎日を過ごしています。大学院への進学を希望される皆さん、ぜひ一緒に頑張りましょう！

「学ぶ」を楽しむ

Soh, Tatsuroh

宗 建郎

志學館大学 人間関係学部 講師



私は九州大学文学部で地理学を学び、そこから大学院に進学して地理学研究室に所属していました。その後はさまざまな大学での非常勤講師や市史編纂事業に携わり、現在では鹿児島県にある志學館大学で教鞭を執っています。学生の皆さんに学ぶ楽しさを伝えられるような教員でありたいと思い、研鑽を続ける毎日を送っています。

一番自由に、自分のためだけに学ぶことができたのが、大学院生時代でした。学部生の頃も自分のための勉強だったことに違いはないはずなのですが、単位を取り、卒業論文を書くために必要な「やらなければならない勉強」という意識が強かったように思います。大学院に進学しても単位を取らなければならないのは同じなのですが、先生方のご指導にも恵まれ、自分自身の力を伸ばしていくために、授業時間にとどまらず、すべての時間が楽しく学ぶ時間だったと思います。

学部生向けの授業にもできる限り出席し、改めて学ぶことで理解が深まっていくことを実感する事は非常に楽しい経験でした。大学院向けの授業では毎日英語の専門書を読むことに追われながらも、最新の研究動向を学び、新しい世界が広がっていく事が楽しい日々でした。授業以外にも自分の研究のための文献を、最新の研究にとどまらず、その基になっている研究や方法論、思想、哲学など様々な分野にわたって集めて読み進めました。こうした意識的な学び以外にも、授業時間外に先生方の様々なお話を伺い、同じ分野や他分野で同じように学び続ける院生たちと会話を交わす中からも、たくさんの事を学びました。自分の世界を広げ、深めるためにすべての時間があるような日々を過ごすことができました。

そのような大学院生の頃に身につけたものは、もちろん専門知識や技術もあるでしょう。しかし、それ以上に、いつでも、どこでも、何からでも学ぶことができるということと、その楽しさという、とても大切なことを学びました。それは大学生や大学院生のような学びの場から離れ、社会に出てからも必ず役に立つと感じています。だからこそ、自分自身も学ぶ楽しさを伝えることができる教員でありたいと考えています。

純粋に「学ぶ」事を生活の中心にすることができるのは、大学院までだと思います。もちろん、院生生活は楽しいことばかりではありません。日々の授業や発表に追われる事もしばしばです。しかし、そうした中に楽しさを見つけたことができた時、自分の世界が大きく広がり、豊かなものになっていくと思います。

良い問いを見つけよう

Osawa, Haruka

大澤 遼可

語学・文学専攻 独文学専修 博士後期課程



みなさんは文学研究と言われるどのようなイメージが浮かびますか。難しい本をたくさん読まなければならないとか、外国語を習得しなければならないとか、そのように思われる方も多いのではないのでしょうか。確かにそのようなイメージも決して間違いではありませんが、それはほんの一面に過ぎません。

文学研究、もしくはもっと広く言えば、大学での勉強において肝心となるのは、良い問いを見つけることだと私は思います。これまでの勉強では、与えられた問いに対して正しい解答をすることが求められてきたかと思います。しかし大学では違います。大学での勉強はまず、自ら問いを見つけることから始まります。そしてそれは同時に、自分自身と向き合うことだとも言えます。自分は何に興味があるのか、何に問題意識を持っているのか、それをじっくりと考えて、真剣に取り組むことのできる問いを見つけなければなりません。そのように時間をかけて自分自身とじっくりと向き合うことができるのは、とても貴重な経験です。それは物事に対する見方、考え方の基盤を作るとも良い機会となりますし、そのようにして築いた基盤は、きっと社会に出てから、一人の人として生きていくための足場となってくれるはずです。

そしてもし、運よく良い問いを見つけることができれば、大学生活はきっと実りあるものになると思います。そのとき、難しい文献や外国語はまるで宝の地図のようにその答えを示してくれる…とまでは都合よくいかないとしても、その問いを解くための何かヒントとなってくれるはずです。「良い問い」とはどのような問いか、という定義はとても難しいのですが、そんな風にヒントを探しながら好奇心を持って本を読んだり、世界を見つめなおしたりすることができるのであれば、それは本当に良い問いなのではないかと思います。

私は現在独文学研究室に所属し、自分の研究テーマに取り組んでいます。ここではそれぞれが自分の研究テーマと向き合いながらも、時には協力し合ったり、意見を交換し合ったりできる理想的な環境が整っています。文学って何だか難しそう、外国語は苦手、というイメージだけで敬遠したりせず、少しでも興味のある方はぜひ、文学コースも専門分野の候補の一つにしてみてください。

一人でも多くの皆さんが、実りある大学生活を送られることをお祈りしています。

九大で学ぶ後輩諸君へ

Tano, Takeo

田野 武夫

拓殖大学 政経学部 准教授



平成16年に私は九州大学大学院文学研究科で博士号(文学)を取得し、平成19年に拓殖大学政経学部へ赴任した。18-19世紀のドイツ文学、とりわけヘルダーリンを中心に研究している。

学部、修士課程、博士課程の全てを九大で学んだ。現在の独文学研究者としての知識は、全て九大で得たものである。大学院では、テキストに寄り添う姿勢を徹底して叩き込まれた。言葉に即して語る態度は、あらゆる作品解釈の基礎となるものであり、自分の研究の土台にもなっている。

九大の独文学研究室を訪れる人の多くが、九大は活気があると言う。会員数が減少傾向にある全国組織の日本独文学会とは対照的に、九州大学独文学会の会員数はむしろ増加傾向にある。大学の専任ポストも九州を中心とした西日本だけでなく、ここ近年

は東京でも九大出身者がポストを得る事例が増えてきた。首都圏の独文学会では、活気ある「強い九大」の認識が定着しつつある。

このような九大の強さは、のびのびと学べる環境にあるとも言えよう。首都圏の大学院では、必要以上に競争意識に曝され、自分を見失う者も多い。しかし九大には、切磋琢磨しながら、強い信頼で結ばれた人間関係を築く風土がある。自分自身、大学院時代は徹底的に学び、先生や先輩、後輩たちと大いに語り合った。ここで得た絆は一生続いて行くだろう。

首都圏と比べ大学数が少ない九州では、学会などの関連行事を行う人員が限られている。そのため大学院生も、学会業務や学会誌の編集作業などを頻りにこなさなければならない。しかし、これがいい経験になるのだ。現在、拓殖大学人文科学研究所の機関誌編集委員や日本独文学会ドイツ語教育部の幹事などを務めているが、これらの業務に主体的に取り組めるのは、九大で培った経験があるからである。

独文学研究室は、ドイツ人研究者の招待講演など国内外の様々な行事を積極的に引き受けている。これらの活動を通して大学院生は研究者、教育者としてのコミュニケーション能力を高めることができる。九大出身の若手ドイツ語教員は、全体的に授業評価が高い。研究室の高い活動力が、その一因であるのは間違いない。FDの重要度が増すにしたがって、この強みは九大の大きな追い風になるだろう。

九大からもたらされる後輩たちの活躍の知らせに、いつも勇気づけられている。九大で学ぶ学生たちが、今後もこの輝かしい伝統を引き継いで行くことを心から願っている。

倫理学から主体的な学びへ

Terada, Atsushi

寺田 篤史

徳山大学経済学部特任講師



私は平成11年の入学の翌年から学部・大学院と倫理学研究室に所属していました。博士課程退学後しばらく非常勤講師をしていましたが、平成28年に徳山大学経済学部へ赴任しました。勤務校では倫理学の授業も担当してはいますが、アクティブ・ラーニング研究所に所属しALプロデューサーとして大学教育におけるアクティブ・ラーニング(AL)の推進を本務としています。今や学校教育の目的はALを通じた「主体的で対話的な深い学び」へと転換しつつあり、私は勤務校でその仕組みづくりに取り組んでいます。哲学・倫理学からはずいぶん離れてしまいましたが、間違いなく倫理学研究室での学生生活が今の仕事に活かしています。厳しくも親身な指導をしてくださる先生、面倒見のいい先輩の存在はもちろん大きいです。倫理学研究室の独特のユルさがよかったのだと思います。

ALとは、大雑把にいうと、教員が一方向的に知識を伝えるのではなく学生の能動的な学習を取り入れた授業のあり方を指します。私が当時受けた授業は、講義も演習も目新しい手法こそ用いられてはなかったものの、決して一方通行の授業ではありませんでした。授業で扱っている問題や取り組んでいるテキストの読みについて学生は学部生も院生も関係なく議論に参加いつでも発言を求められました。自由に議論し、率直に意見を出し合える雰囲気はALの実施に不可欠な要素です。授業では学部生の質問には院生がまず答えるといった教え合いの習慣がありました。これも立派なALですが、こうした習慣も分野や学年を超えて議論しあう土壌づくりになっていたのでしょう。

他の学問に負けず劣らず倫理学で扱う対象は実に多様です。私が受けた授業だけでも、近代・現代の英米独仏の哲学・倫理学だけでなく、近代日本思想や儒学や仏教説話、あるいは情報倫理や生命・環境倫理などの応用的な問題を扱う授業がありました。論文指導のゼミでは、院生の論文や学部生の卒論のテーマは、誰そのの哲学者の思想を解き明かそうとするものから、哲学・倫理学の特定の問題に取り組むもの、社会問題や自分の趣味から出発するもの、と何でもアリでした。自分の専門やその時の関心の対象についてはもちろん、そうでないものについて一生懸命考え、質問し、教える機会は、専門外の分野に飛び込んだ今振り返るととても貴重な機会でした。

後輩のみなさんには、この独特のユルさ(自由な雰囲気と対象の多様性という意味で)を活かしてのびのびと自分の学びを深めて欲しいと思います。